

PROFILE

井本 敬二

自然科学研究機構生理学研究所長



本年4月に自然科学研究機構生理学研究所長に就任しました。“ヒトのからだと脳の働きを大学と共同で研究し、そのための研究者を育成する研究所”である生理学研究所は1977年に創設され、内菌耕二初代所長から数えて私で7代目となります。歴代の所長は江橋節郎先生をはじめとする錚々たる先生方で、これらの先生方と名前を列べるとは本当におこがましいことですが、これまでの所長の先生方に少しでも近づけるように努力する所存です。

2004年の国立大学の法人化に伴って、生理学研究所は大学共同利用機関法人自然科学研究機構の研究所となりました。大学共同利用機関(法人)は国立大学(法人)と同じ法律に定められており、共に学術研究の水準の向上を図ることが求められています。トップダウン的な運営を前提としている独立行政法人とは異なり、大学共同利用機関は研究者コミュニティに基づく研究機関です。前所長の岡田泰伸先生(日本生理学会前会長)は、所長在任中に生理学研究所のミッションを所内・所外にわかりやすくする努力をなされました。そのミッションとは、1. 世界トップレベル研究推進(分子・細胞から個体までの階層をシームレスに)、2. 共同利用研究推進(各種装置の設置、共同利用への提供)、3. 若手研究者育成・発掘(大学院教育、トレーニングコース)です。この基本的な考え方は、今後も守って行かなくてはなりません。

しかし科学は日々進歩しており、研究の内容もそれに伴って変化していかなくてはなりません。

特に最近のバイオサイエンスや脳科学の進歩は目覚ましいものであり、その流れに遅れることなく研究を発展できるように私たちも努力をしています。2012年度には共同利用研究強化の一環として、遺伝子導入用ウイルスベクターの開発と研究者への供給、3次元走査電子顕微鏡(自動切削機内蔵型走査電子顕微鏡)の設置と共同利用への提供などを、これまでの事業に加えて開始しました。また今年度末には7テスラのMRIが設置される予定であり、安定した運転が可能になった時点で共同利用に提供する計画です。またこれらの実験装置だけでなく、より複雑な系での測定および解析の方法に関しても、様々な発展がなされています。さらに生理学研究所には生理学・神経科学のエキスパートが多くいますので、その知識・技術の蓄積を共同研究や研究会といったいろいろな形で活用していただければと思います。

今後とも生理学研究所にご支援賜りますようお願い申し上げます。

略歴

- 1976年 京都大学医学部卒業
- 1985年 内科・神経内科の臨床を経て京都大学医学部医化学教室助手、その後講師、助教授(この間、Max-Planck研究所に留学)
- 1995年 生理学研究所教授、総合研究大学院大学教授併任
- 2013年 生理学研究所長